

第88回 憲法を考える映画の会

# 豹変と沈黙

日記でたどる沖縄戦への道  
手元資料

- 日時：2026年6月7日（日）  
13：30～16：30
- 会場：文京区民センター 3A会議室  
(地下鉄春日駅・後樂園駅)

## ■プログラム

- 13：30～13：40 この映画について
- 13：40～15：20 『豹変と沈黙 日記でたどる  
沖縄戦への道』上映（104分）
- 15：20～15：30 休憩
- 15：30～16：30 トークシェア  
(監督ビデオメッセージ 10分)

- 参加費：一般 1000円 若者：無料

第88回 憲法を考える映画の会 試写会

# 豹変と沈黙

日記でたどる沖縄戦への道

2026年6月7日（日）  
13時30分～16時30分  
文京区民センター 3A会議室  
(地下鉄 春日駅 2分・後楽園駅 5分)

■プログラム  
13：30～13：40 今回の作品について  
13：40～15：20 映画『豹変と沈黙 日記でたどる沖縄戦への道』(104分)  
15：30～16：30 トークシェア

■参加費：1000円 (若者：無料)  
(予約、前売りなどは行っておりません。  
参加費は、会場でお支払い下さい。)



作家と沈黙 日記でたどる沖縄戦への道

イントロダクション  
「戦後60年」→アジア太平洋戦争の記憶を思い起こすことが求められる節目の年です。  
『豹変』とは、日本兵が戦場で人間性を失われ、誰かにもわからない「人間兵器」へと仕立て上げられていった姿を指しています。  
『沈黙』は、戦後、元日本兵らが口を開き始めたこと、「豹変」の欠片を拾い集めて生きていくようになった戦後の日々などを表しています。  
元日本兵本人が資金で書籍インタビューができる時代には、戦中日記はなぜか注目されなかったかもしれませんが、あまりにも高価な書籍であり、また、戦に携わって戦争について多くを語らなかつたため読者がほとんどです。日記は日本兵たちの知られざる一面を浮かび上がらせる社会的対話なので、本書はどこにでもいたごく普通の日本人が、兵士として体験した戦場の一瞬を描いています。生と死は第一、戦場りなども行われた戦場の現場……  
果たして中絶せしめアジアの戦場で何があったのか。戦中日記をどう読み解くことで歴史の真実に迫ろうと挑戦したのが、この新作ドキュメンタリー映画です。  
※本編：104分

監督メッセージ  
本作は、トリアンドエラー(=認知症)から生まれた作品です。トリアンドエラーは『戦中日記』への執着です。  
日記は、戦争や政治のそれではなく、赤名な「兵隊」の心の軌跡を記した。おそらく家庭では『赤名な子』『赤名な』であった日記が戦時中、日本兵へと仕立て上げられていった過程を辿りました。  
トリアンドエラーのエラーとは、出兵した世代とその息子や孫の世代では記憶が異なる。戦争体験が伝えない。昔の思い出を語り出すことは難しく、誰かから聞き取ってしまふことです。2世にいくインタビューしても五十年前になることが多いのです。  
交際がなくなった後、息子や孫が遺された日記に思いを寄せるのは、目も通さずに古物として扱われている例もありました。しかし私にとって、戦中日記との出会いが新たな地平を開いてくれました。万葉集の文字が響かずに伝えられる力があつたのです。戦争が人間の生かたで、生身の人間が戦争を伴って行つたものであることを教えてくれました。戦中日記は戦争で奪われた一次資料であり、貴重な一次資料です。私はこれら日記を「生きた証」として世に伝えたいと、この映画に挑戦しました。(監督 藤原 隆)

## ■手元資料 目次

- 資料① 映画『豹変と沈黙』について P.2～P4
- 資料② この映画を見て考えたいこと P.4
- 資料③ 映画のもとになった「日記」「資料」 P.5
- 資料④ 日中戦争・南京事件に至る年表・用語解説 P.6～P.7
- 資料⑤ 日中戦争・南京事件についての書籍 P.8
- 資料⑥ 「兵士がとらえた戦争」を描く映画 P.9
- 資料⑦ 日中の深い傷跡～南京事件を巡る映画 P.10～11
- 資料⑧ 第87回憲法を考える映画の会（憲法映画祭）  
報告および参加者感想から P.12～15
- 資料⑨ 憲法を考える映画の会 あとおいニュース P.16

## 憲法を考える映画の会



〒185-0024  
東京都国分寺市泉町3-5-6-303  
TEL & FAX：042-406-0502  
HP：http://kenpou-eiga.com/  
E-mail：hanasaki33@me.com

## 資料① 映画『豹変と沈黙』について（1）映画の解説

### 【映画の解説】

#### イントロダクション

「戦後80年」…アジア太平洋戦争の記憶を思い起こすことがより求められる節目の年です。

「豹変」とは、日本兵が戦場で人間性を損なわれ、望むと望まぬにかかわらず“人間兵器”へと仕立て上げられていった姿を表しています。

「沈黙」は、戦後、元日本兵らが口を閉ざしたこと、“豹変”の欠片を胸に秘めて生きることになった戦後の日々などを表しています。

元日本兵本人が存命で直接インタビューができる時代には、戦中日記はさほど注目されなかったかもしれません。あまりに過酷な体験であり、また 緘口令があって戦争について多くを語らなかった体験者がほとんどです。日記は元日本兵たちの知られざる一面を浮かび上がらせる社会的な財産なのです。

本作はどこにでもいたごく普通の日本人が、兵士として体験した戦場の一端を描いています。生と死は紙一重、首斬りなども行われた異常な戦場…

果たして中国をはじめアジアの戦場で何があったのか。戦中日記を丁寧に読み解くことで歴史の真実に迫ろうと挑戦したのが、この新作ドキュメンタリー映画です。

※本編：104分

※本作には差別表現もありますが、当時の実態を伝えるため言い換えなどはせず、そのまま表現しています。

#### 監督メッセージ

本作は、トライアンドエラー（＝試行錯誤）から生まれた作品です。トライの一つが『戦中日記』への着目です。日記は、軍幹部や政治家のそれではなく、名もなき『一兵卒』のものを取り上げました。おそらく家庭では「良き息子」「良き夫」であった庶民が軍に徴集され、日本兵へと仕立て上げられていった過程を追いました。

トライアンドエラーのエラーとは、出兵した世代とその息子や娘の世代では記憶の“断絶”があり、戦場体験者不在のいま、彼らの思いに肉薄することは難しく、踏み込みが浅くなってしまふことです。2世にいくらインタビューをしても五里霧中になることが多いのです。

父親が亡くなった後、息子や娘が遺された日記に関心を寄せるのは稀で、目も通さずに古物商に流している例もあります。しかし私にとって、戦中日記との出会いは新たな地平を開いてくれました。万年筆の文字が静かに伝える戦場のリアルがありました。戦争が人間的な営みで、生身の人間が感情を伴って行うものであることを教えてくれました。戦中日記は戦場で書かれた一次資料であり、貴重な一級資料です。

私はこれらの日記を“社会の記憶”として歴史に刻みたいと、この映画に挑戦しました。（監督 原 義和）

#### 【監督の紹介】

「過去に目を閉ざす者は、現在にも盲目となる」…戦後40年の1985年にドイツのワイツゼッカー元大統領が連邦議会で行った演説の言葉です。未来を開く確かな鍵は、歴史に学び続ける現在進行形のプロセスでこそ見出されるものだと思います。

本作は決して“大作”ではありません。しかし、私なりの地道な挑戦の一つの結実です。「戦後80年」に新作ドキュメンタリー映画を放つ意味は決して小さくありません。どうか、日本が行なった戦争、戦後の歩み、父親たちの知られざる実態を受けとめ、共に考えるきっかけとして本作をご覧ください。できれば幸いです。

本作は、1937年の盧溝橋事件で本格化した日中戦争が主な舞台です。3人の日本兵と、やがて徴兵されていく1人の沖縄人の日記を朗読しながら、戦場の実態をひも解いていく…いわば“朗読劇”です。4人は名もない一兵卒。彼らの戦場での道行きを、日記と共にたどりまふ。

彼らは、国策によって豹変させられ、加害者にさせられた被害者でもあります。映画は彼らの罪を問うものではなく、日記が無言で告発している日本国家の罪責を問うものです。➤



➤あるいは国家の加害性を検証するためのものです。検証するに値する重大な問いを日記は投げかけていると思います。

#### ● 監督プロフィール

1969年 愛知県名古屋生まれ

2005年より 沖縄を生活拠点に ドキュメンタリー番組の企画制作を行う

主な制作番組：「戦場のうた～元“慰安婦”の胸ぐら現実と歴史」（2013年琉球放/2014年日本民放連テレビ報道番組最優秀賞）、「Born Again～画家 正子・R・サマーズの人生」（2016年琉球放送/第54回ギャラクシー賞優秀賞）、「消された精神障害者（2018年Eテレ ハートネットTV/貧困ジャーナリズム賞2018）」など

2021年に映画「夜明け前のうた～消された沖縄の障害者」を劇場公開

著書「消された精神障害者—私宅監置された無名の犠牲者たちの生きた証しを伝える」（高文研）、編書「沖縄からアメリカ 自由を求めて！ 画家 正子・R・サマーズの生涯」（高文研）

#### スタッフ・キャスト

出演	橋内良平、宮城さつき、西尾瞬三
書	西端峰苑
日記	武藤秋一、山本武、昇、金城信隆
ナレーション	相沢舞
インタビュー協力	田中信幸、山本富士夫、山本敏雄、具志堅正己、常小梅、呉先斌、上村真理子、藤田佳久
中国語通訳ガイド	戴国偉、芦鵬、李青凌、
韓国語通訳ガイド	姜惠楨
美術協力	武富慈海（兵士・庶民の戦争資料館）、藤野祐真（NHKアート）
撮影協力	川田文子、蘇智良、小橋川清弘、中田耕平、半谷珠代、所薫子、松井裕子、周峰（侵華日軍南京大虐殺遇難同胞記念館）、明成皇后を考える会、愛知大学記念館、大堀相馬焼半谷窯、沖縄ホテル、兼浜克弥
資料協力	韓国独立記念館、侵華日軍南京大虐殺遇難同胞記念館、南京民間抗日戦争博物館、上海師範大学、沖縄県平和祈念資料館、読谷村史編集室、南風原町立南風原文化センター、くまもと戦争と平和のミュージアム設立準備会、立命館大学国際平和ミュージアム、中支従軍記念寫真帖刊行会、支那事变写真全輯（朝日新聞社） 東亜同文書院大学第41期、上地克哉、吉見義明、大島幸夫、村瀬守保
英語版翻訳	奥山美由紀、親川志奈子
ヘアメイク	内間加奈子
音響効果	北條玄隆（東京サウンド・プロダクション）
スタジオ	ヨコシネディーアイエー
編集	梶隆二、天野薫、斎藤直彦
MA	堀部潤 コーディネーター 江草達晃
制作協力	南京・沖縄をむすぶ会
アドバイザー	田中宏、齊藤道雄、仲里効、砂川浩慶
構成	秋山浩之
監督・撮影・編集	原義和

## 資料① 映画『豹変と沈黙』について（2）登場人物・寄稿

### 【登場人物の紹介】

#### 田中信幸さん

父は1937年8月、熊本13連隊から中国に出兵。戦後、父と対話を続けた  
(映画本編より)

◆ナレーション：学生時代の1972年、田中さんは沖縄返還に反対するデモ闘争に参加し、逮捕されます。その獄中から、父親に手紙を出します。

◆インタビュー：「あなたが参加した戦争は侵略戦争だったのではないかと、丁寧に書きましたけれども。保釈されて家に帰る機会を捉えて、父親にいろいろ問いかけていくということが始まったわけですね」

#### 山本敏雄さん

父は1937年9月、鯖江36連隊から中国に出兵。父が持ち帰った陣中日記を大切に保管  
(映画本編より)

◆ナレーション：敏雄さんは、大人になってからも父・武と同居し、戦争の話をよく聞いたと言います。

◆朗読：見る見るうちに、戦友は倒れていく。ああ、なんたる悲惨なることぞ。

◆インタビュー：「同じ突撃の仲間たちも、ばたつと即死で死んでいく。そういう死にざまを見ていて、すごい復讐の念が燃えるもんだと（父は言っていた）」

### 【寄稿】

#### 仲里効さん（映像批評家）

静かに、烈しく、痛い  
— 戦後80年の風景が変わる

日本の〈戦後〉は、敗戦を抱きしめ、稀に見る経済発展と虚像の「平和」の内に引きこもり、それゆえにタブーを自らつくってしまってきたのではないかと、そしてそのことがアジア太平洋戦争の罪責から眼を逸らし、耳を塞いできたのではなかったのか。

見終わったあと、心身の深みに刺さってくる痛覚をともなうてやってきた感想である。その意味でこのドキュメンタリーは“やっかい”な映画になっている、ということなのかもしれない。あえてそういうのは、戦争の罪責を不問にすることなく、“あの戦争”を“この戦争”に、“かれらの戦争”を“われらの戦争”にしていく、困難な分有への問いかけと探訪の試みになっているからである。

監督の原義和は、そうした“やっかいさ”に分け入っていく映像の求道者の一人である、と間違いなくいうことができる。その求道はしかし、外に向かうというよりもむしろ内へ、わたしたちの内部に封印され吹き溜まっている暗がりへとまなざしを向けていく。(全文は映画パンフレットに掲載)

#### 呉志堅正己さん（南京・沖縄をむすぶ会代表）

信隆叔父さん、あなたの姉の息子です。わたしは戦後生まれなので、あなたには写真でしか逢っていません。あなたのことは、わたしの祖母も母もほとんど何も話ませんでした。ただ、母があなたは本が好きで、よく読んでいたと話していたことは憶えています。

あなたはなぜ日中戦争の真っ只中の1940年に、上海の同文書院に入ったのでしょうか。母はあなたをこの大学を薦めたのは自分で「信隆が死んだのは私のせいだ」と悔やんでいたのを憶えています。

信隆叔父さん、あなたの帰りがかった沖縄は、いままた日本という国の戦時体制の最前線に立たされています。米軍と旧日本軍を骨太のバックボーンにした自衛隊が一体になって、射程距離2000\*のミサイルも配備する軍事要塞化が進められています。

万が一にも中国と戦争になったら、ここ沖縄だけでなく、間違いなく日本のほとんどの市民が被害者になるだけではなく、中国にとっては加害者になります。わたし／たちは、加害者にも被害者にもなりたくありません。(全文は映画パンフレットに掲載)



#### 伊波敏男さん（作家）

わが国の歴史を振り返れば、徹底した忠君愛国教育で「東亜共存共栄」の皇旗の下に、国民を総動員した。親愛なわが祖父や父たちは、徴兵され兵士となり、戦地では、人倫の規を失い豹変し、殺し、犯し、破壊など暴虐の限りを尽くした。

地球という星では、今、至る所で、国家・宗教・民族対立による殺し合いや破壊が続いている。戦禍による犠牲は、固有名詞のない数量の多寡だけで論ずるべきでない。命の尊厳は、常に一人称で語るべきである。

今、特に一部の政治家が、沖縄戦史を歪曲し、歴史の見直しを叫びはじめている。だからこそ、余計に、わが国の過ちの歴史を、次世代がバトンタッチできるためにも、映画「豹変と沈黙」を観ることをお勧めしたい。

#### 川満彰さん（沖縄近代史家／沖縄国際大学非常勤講師）

平穏な暮らしのなかで過ごす私たち人間の本性・残虐性は、普段はどこに潜んで、どのように浮遊しているのだろうか。

沖縄県国頭村出身の金城信隆さん（1923年生まれ）は、上海にあったアジア最高学府とも言われた東亜同文書院大学へ入学した。信隆さんは書院で中国語を徹底して学び、日中友好のかけはしになることを志す一方で、日本軍へ憧れ「靖亜の士を志す」（1941年11月28日付）という希望を持っていたと記している。しかし、正義心で描いていた「靖亜の士」は、戦場で女性や子どもたちを突き殺す自らを曝け出した。戦場では人間の本性、人間味を失った醜く、悪鬼の部分をさらけ出さないと立ってられないからである。(全文は映画パンフレットに掲載)

#### 落合恵子さん

いつ、どこで、どのようにして、人は「自分」になっていくのだろうか。わたしはわたしになってきたのだろうか。それは、完了形であるのだろうか。それとも、その先のある幾十幾百もの明日に続く道程であるのだろうか。『豹変と沈黙』を観ながら、しきりにそんなことを考える。

あなたにも考えていただきたい。あなた自身が自分だと考え、周囲もそう認めている自分像は、真実、自分であるのだろうか。平穏な時には、そうであったとしても。有事に「豹変」する自分を裡に秘めていま生きているのだろうか。

本編に登場する日記の書き手である青年たち。誰かの息子や誰かの夫、誰かの兄や弟、いとこでもあるひとたち。もの静かな学徒が、穏やかではにかみやの青年が、いつ、どこで、どのようにして、今までは違っていた自分になるのか。自分の裡にいた別の自分を表に導き出すのか、を。

激しい憤り。凍える孤立感。拭いきれない深い悔い。交互にやって来る人間への激しい否定と僅かな肯定。言葉にならない酸鼻な体験を何度となく重ねる中で、自分が考えている自分そのものが破壊され、予想もつかない自分になっていく怯え。

その、「ありありとした実感」にひとは圧倒され、沈黙を強いられる。

## 資料① 映画『豹変と沈黙』について (3) 寄稿 資料② この映画を見て考えたいこと



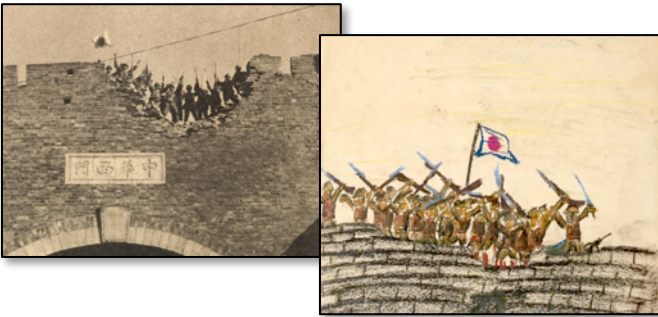
【寄稿】

村上 有慶さん  
(戦跡保存全国ネットワーク運営委員)

この映画の前半は、普通の「良い人」が侵略する戦場で人間性を奪われて行く状況を見事に描いている。後半は、本人の記録には、結局のところ加害性の部分など『空白』が多くあることや、それが“嘘”とも言える部分につながってしまう危うさを浮き彫りにしている。戦後世代が侵略戦争の歴史的事実を元にして分析し、批判的に見ることの大切さをよく描いていると思う。

その危うさは、沖縄県民にとっても同様である。南京大虐殺の実行者であった牛島満が司令官となり、中国で慰安所設置や住民総スバイ視を行った長勇が参謀長となって沖縄へやってきたという日本軍の本質を、住民の体験証言から批判してきたのが、沖縄における戦場証言の基本的性格だった。しかし、この間に沖縄で起こっている事態からは、沖縄県民自身が「慰安婦」の存在を打ち消し、日本軍による「住民虐殺」をなかつたことになってしまう重大な意識の変化が見られる。その変化の上に、米軍基地の存在を肯定し、自衛隊基地の拡大を容認する政治状況が進み、若者を中心とする多数がそれを後押しする状況ともなった。沖縄戦の事実が歪められる事態が大きく進行している。体験者の想いに頼らずに、平和資料館での活動や戦跡保存で語ることの本質を、もう一度考え直す時期に来ていると言えるだろう。

(\*以上、「映画『豹変と沈黙—日記でたどる沖縄戦への道』公式HP <https://www.yoshikazuhara.com/>より)



### 映画『豹変と沈黙—日記でたどる沖縄戦への道』 上映会 問合せ先

- 自主上映会のお問合せは  
下記メールアドレスか携帯電話へお願いします。

メール : [nausicaa19@protonmail.com](mailto:nausicaa19@protonmail.com)  
携帯 : 090-1544-9350

### 【この映画を見て考えたいこと】

「戦争」あるいは「軍隊」が、どのように「人」を変えてしまうのか、それぞれの人生を狂わせ、戦後もずっと苦しませ続けていくのか、考えさせる映画です。

「日記」という一人称の語り、兵士たちのもがき、苦しみ、その時の心情の吐露を私たちに伝えます。

日記は回想ではなく、その苦しみや悩みのさなかに書かれているものです。そしてこれらの日記が書かれている時は戦争の真っ最中です。だからひとりひとりの兵士が「戦争」をどのように見て、感じていたのか、その心の内にある思いを、私たちは日記を通して、透かしてみることができます。

日本が行った戦争のことを語り伝えることのできる人も、すでにもうお歳で少なくなっています。増して自分自身が戦争に行きつて戦ったという人はすでに100歳を超えてしまっています。私たちは、どうしたら「戦争はもう二度としてはならない」と苦しんだ彼らの思い伝えることができるのか、そして今、「戦争を繰り返さない」と言う主張に活かしていけるのかと、ずっと考えてきました。

そうしたときにこの映画に出会って、こうした形で兵士たちの苦しみ、悔恨、その時の心の内を伝えることができるのではないかと思います。

映画の作り手は、日記に書かれた兵士ひとりひとりの心の内を残した言葉を探し当てて、それをもとに、表現の限りを尽くして、映画を見る人がイメージできる形にし、伝わってくるものになっています。

私たちを含め、戦争を知らない多くの人に、とくにこれからの社会、世界を作っていく人たちにてもらい、「戦争」とはどのようなものか自分のこととして考えていてもらいたいと思います。

今の自衛隊の「兵士」も、戦争を始めれば、人を殺し、殺される戦いに巻き込まれていきます。それが具体的にどのようなことなのか、なぜそんなことにいのちを人生を委ねなければならぬのか、想像できるでしょうか。

「憲法9条があったから、戦後何十年もの間、国の名において、ひとりの人を殺さず、殺されることもなかった」この言葉の意味をかみしめて、もう一度「戦争をしてはいけない、させてもいけない」という意志を強くしましょう。

日本は 武器を輸出して、他国の人を殺し合いをさせる国になってしまいました。また自衛隊も、自分たちの「国」がよければ、他国を攻撃し、人を殺してもよいと戦争の準備を着々と進めています。

憲法9条の歯止めがあったからこそ、戦争に加われないという言い訳の材料があったにもかかわらず、その歯止めをどんどん外していつています。憲法を変えて名実ともに自分から戦争できる国にしていこうとしています。

いったい何のために、誰のためにそんなに戦争をさせたがるのですか。儲けたいからですか。

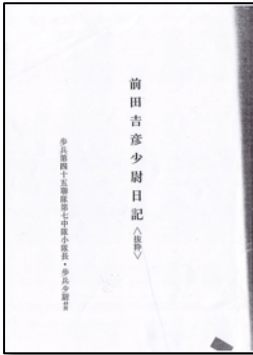
自分たちが儲けさえすれば、自分達がいい暮らしをできさえすれば、ほかの国の人を殺し合うのもいいのではないかと考えるのですか。

戦争を無くすにはどうしたらいいか考えましょう。軍隊そのものを無くし、戦争によってひとりひとりの人の心が変えられないようなものに行くこと。それは「人」と「いのち」を何より大切にするという日本国憲法がもっともめざしていることなのではないかと思うのです。

だから9条がある、そこを変えてはならないと。

## 資料③ 映画のもとになった「日記」参考にした書籍・資料

\*『豹変と沈黙 日記でたどる沖縄戦への道』の原義と監督に、この作品を制作する上で、もとになった日記、参考にした文献、資料をお聞きしたところ、たくさんあって書き切れない中、その一部として次のような資料を教えてくださいました。とくに「非常に意識したことは、中国のいわゆる犠牲になった側の証言を読みたいといくつかを入手し、大いに参考にしました」とのお便りをいただきました。常小梅さんの手記や、下記の本の「この事実を」など）ネットから参照できるものもありますので紹介させていただきます。S.H.



### ■前田吉彦少尉日記（抜粋）

南京戦史資料集 偕行社

1989年11月

・南京攻略の始めから、多数の敵兵が筏に乗って逃げるのを機関銃で掃射。捕虜に対する大隊長の演説。投降した捕虜への発砲パニック。「わずかの誤解で大惨事を惹起したのだという」など他の隊がやったことの伝聞や推察などを含め「大虐殺」をリアルに書き遺している



### ■南京大虐殺生存者 常志強の生活記録（南京大屠殺幸存者常志强的生活史（日文版））

外交出版社／2020年3月刊／作者：常小梅

・南京大虐殺の時に9歳だった父の当時の証言を娘の立場から聞き取る。「彼の両親及び4人の弟は日本軍の刀と銃によりたちまちにわけの分からぬまま澆刺たる生命を失われた。」



### ■山本武の「陣中日記」

隼田喜彦

福井大学リポジトリ：

file:///Users/hanasakisatoshi/Downloads/CV\_AN0021522X-51-003-1.pdf



### ■父・武の戦争を語り継ぐ——中国戦線で何が...

Talk of Father, Takeshi's War Experience : What Happened on the Japan-China War front? JOHA日本オーラル・ヒストリー研究 vol18

\* 下記からダウンロードできます。

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjoha/18/0/18\\_17/\\_pdf-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjoha/18/0/18_17/_pdf-char/ja)



### ■戦史研究ノートの部「角（スミ）証言」の信憑性について 決定版 南京戦史資料集 偕行社刊



### ■「この事実を・・・」「南京大虐殺」生存者証言集（星雲社）

侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館 編／加藤実 訳



### ■南京大虐殺の証明

洞富雄, 藤原彰, 本多勝一 著 朝日新聞社 刊 1986年2月刊

(CiNii=大学図書館所蔵一覧)

<https://ci.nii.ac.jp/ncid/BN00591627.amp>



### ■体験者27人が語る南京事件

虐殺の「その時」とその後の人生

笠原十九司 著, 高文研 刊

南京大虐殺事件研究の第一人者が、これまでの文献にもとづく研究の蓄積に立って、自ら被害者を訪ね、自ら中国語で聞き取った証言集！中国民衆の一人ひとりにとって、南京事件とは何だったのか——？南京事件研究の第一人者が、南京近郊の村々や南京城内に生きる体験者を訪ね、それぞれの人生に即して「被害」の実相を聞き取った初めての記録。あわせて中国における南京事件研究の歩みと現状を伝える！



### ■証言・南京大虐殺 戦争とはなにか（青木書店）

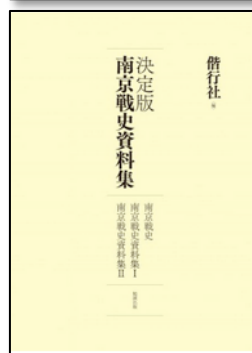
南京市文史資料研究会編；加々美光行, 姫田光義訳・解説 青木書店, 1984.8

昭和館デジタルアーカイブ

[https://search.showakan.go.jp/search/book/detail.php?material\\_cord=000046996](https://search.showakan.go.jp/search/book/detail.php?material_cord=000046996)

(CiNii=大学図書館所蔵一覧)

<https://ci.nii.ac.jp/ncid/BN01132975#anc-library>



### ■南京戦史資料集

偕行社刊 1989年11月刊

\* 南京攻略戦に参加した将兵たちから集められた140あまりの証言をもとに、公正・公平かつ客観的な視点により編纂された『南京戦史』。

また、参戦した将兵の日記および関係部隊の作戦命令・戦闘詳報・陣中日誌など膨大な資料を収録した『南京戦史資料集』、さらに追加収集した史料をまとめた『南京戦史資料集II』。左記載の「前田吉彦少尉日記」はこの中に収められている

## 資料④ 日中戦争・南京事件に至る年表（1）

### 日中戦争・南京事件に至る年表（日・韓・中関係を中心に）

**1874(明治07)** 5月：台湾出兵  
**1882(明治15)** 1月：軍人勅諭発布  
**1890(明治23)** 10月：教育勅諭発布  
**1894(明治27)** 8月：**日清戦争**（～1895）  
 朝鮮に出兵・仁川に上陸  
 朝鮮王朝＝景福宮襲撃・占領  
 国王の妃・**明成皇后を寢所に襲い虐殺**（\*1）  
**1895(明治28)** 下関条約（台湾、澎湖列島を植民地に）  
 三国干渉  
 1899年 12月：義和団事件 北京議定書調印（1901年）で日本など駐兵権  
**1904(明治37)** 2月：**日露戦争**（～1905）日韓議定書締結  
**1905(明治38)** ポーツマス条約締結（韓国を日本の保護国化／旅順・大連の租借権、長春・旅順間の鉄道を得る）  
**1906(明治39)** 伊藤博文 韓国初代統監に就任  
**1909(明治42)** 伊藤博文ハルビン駅頭で暗殺  
**1910(明治43)** 8月：**韓国併合**  
 ・大逆事件  
**1911(明治44)** 10月：辛亥革命、翌1912年清国滅亡し中華民国成立  
**1914(大正03)** 7月：第一次世界大戦参戦（～1918）日本、対独宣戦布告し参戦。  
**1915(大正04)** 1月：中国に21カ条の要求を出す。  
 5月9日、中国が受諾（国恥記念日）  
**1917(大正06)** 11月：ロシア革命  
**1918(大正07)** 8月：富山で米騒動起こる  
 シベリア出兵（～1922）  
**1919(大正08)** 4月：関東庁発足。関東軍成立  
**1920(大正09)** 1月：国際連盟に発足 普通選挙運動高まる  
**1921(大正10)** 11月：ワシントン海軍軍縮会議  
**1923(大正12)** 9月：**関東大震災 朝鮮人、中国人虐殺**  
**1924(大正13)** 1月：第1次国共合作  
**1925(大正14)** 4月：治安維持法、男子普通選挙法成立  
**1926(大正15)** 7月：中国、北伐開始  
 12月：大正天皇死去  
**1927(昭和01)** 蒋介石、四・一反共クーデター  
**1928(昭和03)** 3月：三・一五事件、共産党弾圧  
 4月：日本、第2次山東出兵・**濟南事件**（\*2）・第三次山東出兵  
 6月：**張作霖爆殺**（満州某重大事件）（\*3）  
 6月：治安維持法改悪 最高刑を死刑に  
 8月：パリ不戦条約  
**1929(昭和04)** 4月：四・一六事件 共産党弾圧  
 世界恐慌 金解禁の大蔵省令公布  
 山本宣治右翼凶刃に斃れる  
 共産党員一斉検挙  
**1930(昭和05)** 4月：ロンドン海軍軍縮会議  
**1931(昭和06)** 三月事件・十月事件（クーデター未遂）  
**9月：満州事変**（柳条湖事件）（\*4）以降  
 日本が中国東北部侵略・中国、柳条湖事件を国連に提訴）  
 12月：若槻礼次郎内閣総辞職 犬養毅内閣成立  
**1932(昭和07)** 1月：天皇、関東軍の「果敢迅速」を賞賛  
 上海で日本人僧侶、謀略で殺傷される  
 第一次上海事変  
 3月：日本の傀儡国家「満州国」建国  
 溥儀、「満州国」執政に  
 5月：五・一五事件 犬養首相殺害  
 9月：日満議定書調印・**平頂山事件**  
 10月：満蒙開拓第一次武装移民492人渡満（35年弥栄村と命名）  
 リットン調査団満州派遣・撤退勧告  
 血盟団事件

**1933(昭和08)** 2月：日満軍、熱河省侵略  
 3月：日本、国際連盟脱退  
 5月：塘沽停戦協定成立  
 関東防疫部、ハルビン東南で研究開始（石井731部隊）  
 4月：滝川事件  
 2月：小林多喜二拷問により虐殺  
 6月：**ゴーストストップ事件**（\*6）（軍部・警察対立）  
**1934(昭和09)** 3月：満州国、帝政実施 溥儀を皇帝に  
 ワシントン条約廃棄通告  
 10月：長征開始（35年、延安で陝北ソビエト政権樹立）  
**1935(昭和10)** 6月：梅津何応欽協定（河北省に関する日本の要求承認）  
 11月：冀東防共自治政府成立  
 ロンドン軍縮会議から脱退  
**1936(昭和11)** 1月：華北分離政策決定  
 2月：二・二六事件 軍部の力強まる  
 4月：支那駐屯軍1771人から5774人に増強  
 6月：長距離爆撃機の九六式陸上攻撃機制式採用  
 8月：帝国国防方針、南北併進論に改定  
 9月：広東で日本人殺害される  
 11月：日独防共協定  
 12月：西安事件  
**1937(昭和12)** 7月：**日中戦争始まる**（盧溝橋事件 中国への全面侵略へ）  
 8月：上海で**大山事件**（\*7）・第二次上海事変・「暴支膺懲」の帝国声明・陸軍の上海派遣・国民精神総動員実施要綱決定  
 9月：中国、最高国防会議設立 主席蒋介石 南京空襲  
 第2次国共合作成立  
 11月：重慶遷都宣言・上海陥落  
 日独伊防共協定を結ぶ  
 12月：**南京大虐殺**（南京攻略命令・パナイ号事件）（\*8）・南京占領・大虐殺、日本で提灯行列  
 など祝賀行事）  
**1938(昭和13)** 1月：第1次近衛声明「爾後、国民政府を対手とせず」  
 4月：徐州作戦  
 国家総動員法成立・公布  
 5月：徐州占領  
 7月：**張鼓峰事件**（\*9）  
 8月：武漢攻略作戦  
 10月：武漢全域を占領・広東占領  
 11月：第2次近衛声明「東亜新秩序声明」  
 12月：重慶無差別爆撃（以降43年まで）  
**1939(昭和14)** 2月：海南島占領  
 5月：重慶爆撃（五三・五四大空襲）  
**ノモンハン戦争**（\*10）  
 7月：ノモンハン戦争で細菌兵器使用  
 米、日米通商航海条約廃棄を通告  
 ・朝鮮に国民徴用令制定  
**1940(昭和15)** 3月：汪精衛、南京国民政府を組織  
 8月：近衛内閣、基本国策大綱で大東亜新秩序発表 関東軍防疫部を関東軍給水防疫部に改称  
 零式艦上戦闘機（零戦）はじめて重慶爆撃に投入・百大戦（～10月上旬）  
 9月：北部仏印進駐  
 日独伊三国軍事同盟  
 10月：大政翼賛会発会式  
 ・斎藤隆夫 衆議院で「反軍演説」  
 ・「創氏改名」を行う総督府令を出す

## 資料④ 日中戦争・南京事件に至る年表（2）

<p><b>1941(昭和16)</b> 4月：日ソ中立条約 6月：ドイツ、ソ連侵攻 7月：大本営御前会議、対英米戦も辞せずと決定 関東軍特種演習74万以上の兵がソ連国境に米、在米日本資産の凍結令公布 重慶爆撃一〇二作戦敢行 南部仏印進駐 8月：大西洋憲章発表 9月：御前会議対米英開戦の方針決定 10月：近衛内閣総辞職し東条英機内閣成立 12月：日本陸軍マレー半島に上陸 日本海軍真珠湾奇襲攻撃 日本、米英加豪に宣戦布告 中国、隊日独伊宣戦布告 <b>(アジア太平洋戦争)</b></p> <p><b>1942(昭和17)</b> 4月：米軍機、東京、横浜、神戸など爆撃 <u>浙贛作戦（*11）</u> 「華人労務者内地移入に関する件」閣議決定。 翌年から日本へ中国人を強制連行</p> <p><b>1943(昭和18)</b> 5月：廠窖大虐殺事件（*12） 10月：学徒出陣始まる 11月：大東亜会議 12月：カイロ宣言</p>	<p><b>1944(昭和19)</b> 4月：日本、大陸打通作戦開始（～45年2月） ・学童疎開始まる ・特攻隊作戦始める 7月：サイパン陥落 <b>1945(昭和20)</b> 2月：ヤルタ会談 3月：東京大空襲・沖縄戦始まる（～6月） ・東京などの大都市への空襲が本格化 5月：ドイツ無条件降伏 大本営陸軍部、ソ連の対日参戦に備え北朝鮮の防衛体制強化を下令 ・沖縄で地上戦 アメリカが沖縄占領 8月：毛沢東、日本軍への大反攻指令 アメリカ 広島に原爆投下（8/6） ソ連対日宣戦（8/8） アメリカ 長崎に原爆投下（8/9） 日本 ポツダム宣言を受諾（8/14） 9月：降伏文書調印</p> <p><b>1946(昭和21)</b> <b>日本国憲法公布</b>（11/3）</p> <p>* 「近現代150年年表」「日本は中国で何をしたか——侵略と加害の歴史」年表、近代日本総合年表より構成</p>
--	---

\*\*\*\*\*

### 【日中戦争・南京事件に至る事件の解説】

\* 1：明成皇后暗殺：乙未事変（いつびじへん）は、1895年10月8日、三浦梧楼、岡本柳之助らの計画に基づいて、日本軍士官が訓練してきた朝鮮人訓練隊と日本軍守備隊、領事館警察官、大陸浪人ら日本人らが、王宮に乱入し、李氏朝鮮の第26代国王・高宗の王妃であった閔妃が暗殺された事件。閔妃暗殺事件（びんひあんさつじけん）ともいう

\* 2：済南事件（さいなんじけん）：1928年（昭和3年）、中国山東省の済南における5月3日に始まる日本軍と、蒋介石率いる国民革命軍（南軍）との間に起きた武力衝突事件。その際、日中双方で相手方の官民・居留民らに対する虐殺、残虐行為があったとされる。

\* 3：張作霖爆殺事件（ちょうさくりんぱくさつじけん）は、1928年（民国17年/昭和3年）6月4日、中華民国奉天省奉天市近郊で、日本の関東軍が奉天軍閥の指導者張作霖を爆殺した事件。関東軍は国民革命軍の仕業に見せかけて満洲に巨大な勢力を持つ軍閥の領袖であった張作霖を暗殺し、満洲における日本の勢力拡大を図ったもので、それを機に一気に南満洲に進攻し占領しようとしていた計画もあったとされる。この事実は一般国民には事件後長らく秘匿され、戦後、東京裁判で元陸軍田中隆吉および社会党左派で衆議院議員だった森島守人による証言が出るまでは犯人は不明とされていた。

\* 4：柳条湖事件（りゅうじょうこじけん、中国語：柳条湖事件）とは、満洲事変の発端となる鉄道爆破事件のことである。1931年（昭和6年、民国20年）9月18日、満洲（現在の中国東北部）の奉天市（現在の遼寧省瀋陽市）近郊の柳条湖（りゅうじょうこ）付近で、関東軍が南満洲鉄道（満鉄）の線路を爆破した事件である。その前の6月には黒竜江省で中村大尉事件、次いで吉林省で万宝山事件が発生しており、関東軍はこれらを武力による満蒙問題解決の口実とし、満洲における軍事展開およびその占領を行った。

\* 5：平頂山事件（へいちようざんじけん）とは、1932年（昭和7年）9月16日、満洲国撫順市（現在の中華人民共和国遼寧省北部）において、日本軍関東軍撫順守備隊（独立守備隊第2大隊第2中隊）が、前夜の抗日ゲリラによる撫順炭鉱襲撃事件の報復のため、ゲリラと通じていると疑った撫順炭鉱近くの平頂山集落の住民の多くを殺傷した事件である。

\* 6：ゴースト事件（ゴースト事件）は、1933年（昭和8年）に大阪府大阪市北区の天六交差点で起きた陸軍兵と巡査の喧嘩、およびそれに端を発する陸軍と警察の大規模な対立。「ゴースト事件」とは信号機を指す。大大阪時代末期かつ満洲事変後の中国大陸における戦争中に起こったこの事件は、軍部が法律を超えて動き、政軍関係がきかなくなるきっかけの一つとなった。

\* 7：大山事件（おおやまじけん）は、1937年8月9日夕刻に起こった、上海海軍特別陸戦隊中隊長の大山勇夫海軍中尉（海軍兵学校第60期卒業、死後海軍大尉に特進）と斎藤與蔵一等水兵（死後三等兵曹に特進）が殺害された事件である。中国側からは「虹橋機場事件」と呼ばれる。第二次上海事変のきっかけの一つになった。

\* 8：パナイ号事件（パナイごうじけん、Panay incident）は、日中戦争初期の1937年12月12日、揚子江上において、米国民間人を南京から避難させるために乗せたアメリカ合衆国アジア艦隊河川砲艦「パナイ」を日本海軍機が攻撃して沈没させ、同艦に護衛されていたスタンダードオイル社のタンカー3隻を破壊し、さらにその際に機銃掃射を行ったとされる事件。**パネー号事件**とも表記される。同日にレディバード号事件も発生している。

\* 9：張鼓峰事件（ちょうこほうじけん、ジャングーフアンじけん）は、1938年（昭和13年、康德5年）の7月29日から8月11日にかけて、満洲国東南端の琿春市にある張鼓峰で発生したソビエト連邦との国境紛争である。実質的には日本軍とソ連軍の戦闘であった。なお、ソ連側は**ハサン湖事件**と呼んだ。

\* 10：ノモンハン事件（ノモンハンじけん）は、1939年5月から同年9月にかけて、満洲国とモンゴル人民共和国との間の国境線を巡って発生した紛争。諸外国では「ノリノリ河戦役」などと呼ぶことが多い。第一次（1939年5月 - 6月）と第二次（同年7月 - 9月）の二期に分かれる。1930年代に、満洲国、後に日本（大日本帝国）と、満洲国と国境を接するモンゴルを衛星国にしていたソビエト連邦との間で断続的に発生した日ソ国境紛争（満蒙国境紛争）の一つ。両国の後ろ盾の大日本帝国陸軍とソビエト赤軍との間で最大規模の軍事衝突となった。

\* 11：浙贛作戦（せつかんさくせん）は、太平洋戦争中の1942年（昭和17年）4月から9月まで中華民国の浙江省、江西省などで行われた日本軍の作戦。「浙」は浙江省、「贛」は江西省を指す。

\* 12 廠窖（しょうこう）大虐殺事件：1943年5月9日から12日の4日間に湖南省南県廠窖鎮で、中国軍人および民間人合わせて3万人以上が殺害され、3千人以上が負傷、2千人以上が強姦されたという。中国側は、南京虐殺に次ぐ日中戦争中で2番目の規模の虐殺事件であり、太平洋戦争期では最大の虐殺事件であると主張している。

\* 【用語解説】は年表の中にある「よくわからない事件」などを主にウィキペディア（Wikipedia）の説明から掲載しました。Wikipediaの説明の冒頭のみを拾い出しているため、それぞれ事件の背景やその影響などを知りたい方はさらに検索してお調べください。

## 資料⑥ 日中戦争・南京事件についての書籍

### 日中戦争・南京事件関連書籍・資料

■ 笠原十九司著『南京事件 新版』  
岩波新書 2026年

2026年に増補版が出てより充実した内容に。  
日本軍の一大汚点、南京事件。蛮行はいかに生じ、推移し、いかなる結果を招いたのか。日中全面戦争にいたる過程、虐殺の被害の実相、推定死者数等を旧版より精緻に明らかにし、事件の全貌を多角的に浮かび上がらせる増補決定版。

■ 笠原十九司著『日中戦争全史 上・下』  
高文研2017年  
日中全面戦争とはどのような戦争だったのか？

1937（昭和12年）年の盧溝橋事件から始まった日中全面戦争は、41（昭和16年）年に始まったアジア太平洋戦争の中に包摂され、“主戦場”は太平洋戦域に移ったという認識が定着している。

しかし、多くの日本人は、中国大陸には宣戦布告もせず百万の軍隊を送り込み、長期にわたる無差別戦略爆撃、国際法違反の生物兵器や毒ガス兵器を用いた化学戦を繰り広げた歴史事実を知らず、41年の対英米戦争が始まって以降の中国戦線への認識が欠落している。  
本書の特徴は、これまでの歴史書にない海軍の謀略、宣戦布告無しの爆撃など海軍の動きを克明に記述。日中全面戦争とアジア太平洋戦争を関連づけて全体像を描くために、日中戦争研究の第一人者である著者が10年を費やし描いた労作である。

■ 日本中国友好協会「日本は中国で何をしたか——侵略と加害の歴史（概説・監修：笠原十九司（日中友好ブックレット3））」

中国との戦争については多くの出版物が発行されていますが、このブックレットでは侵略戦争の概説とともに、被害者の証言や加害行為をおこなった軍人の体験を具体的に紹介し、中国への侵略戦争の実態を明らかにします。（「はじめに」より抜粋）

■ 日本軍兵士（吉田裕 著）

310万人に及ぶ日本人犠牲者を出した先の大戦。実はその9割が1944年以降と推算される。本書は「兵士の目線・立ち位置」から、特に敗色濃厚になった時期以降のアジア・太平洋戦争の実態を追う。異常に高い餓死率、30万人を超えた海没死、戦場での自殺と「処置」、特攻、体力が劣悪化した補充兵、靴に鮫皮まで使用した物資欠乏……。勇猛と語られる日本兵たちが、特異な軍事思想の下、凄惨な体験を強いられた現実を描く。アジア・太平洋賞特別賞、新書大賞受賞



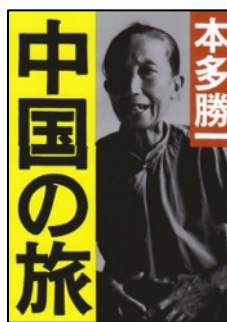
■ 私の従軍中国戦線 一兵士が移した戦場の記録 村瀬守保写真集

1937年（昭和12）から2年半、中国各地を転戦しながら写した3000枚の従軍写真。巨大な狂気の渦に巻き込まれた日本人兵士や中国民衆の姿。貴重な写真の数々が装い新たに終戦60年の今、歴史を証言する。

#### 目次

第1部 入隊そして上海へ 第2部 上海から南京へ  
第3部 徐州作戦―“麦と兵隊” 第4部 漢口作戦―大別山脈を越えて 第5部 遙か山西省へ―八路軍討伐 第6部 ノモンハンそして帰還

■ 本多勝一 著『中国の旅』



『中国の旅』（ちゅうごくのたび）は、朝日新聞記者（当時）本多勝一によるルポルタージュ作品である。日中戦争中の日本の戦争犯罪を現地の視点から明らかにすることを目的として、1971年6月から7月にかけての約四十日間、国交正常化前の中国各地で取材を行い、朝日新聞夕刊に1971年8月末から12月まで連載、1972年に朝日新聞社から単行本『中国の旅』として

刊行された。また、姉妹編として写真を主とした『中国の日本軍』が創樹社より刊行された。

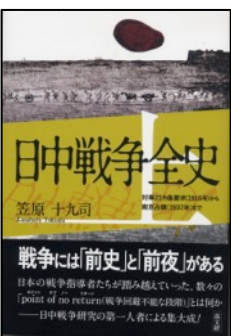
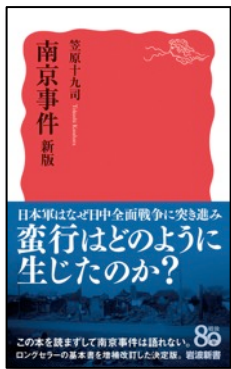
中国当局の協力により各地で案内人による説明と被害者への取材がセッティングされ被害者本人による生々しい証言が伝えられた。当時、一般の日本人にはあまり知られていなかった南京事件、三光作戦、平頂山事件、万人坑などをセンセーショナルに取り上げ、連載中から大きな反響を呼んだ。文化大革命中の中国国内の様子を伝えるルポルタージュとしても重要である。

日本の戦争犯罪を中国側の視点で伝えたものとして評価される一方、中国共産党の用意した人物の発言や中国側の主張を一方向的に掲載したものだとする批判も多く、南京大虐殺、百人斬り競争などは事実関係を巡って戦争責任や歴史認識についての論争を巻き起こした。（Wikipediaより）

■ 『ジョン・ラーベ 南京のシンドラの謎～映画では語られなかったもう一つの真実～』（永田喜嗣 著）  
コスモリアン・ブックレット No.1



■ 『海外が描いた日本の戦争～世界の対日戦争映画が語る日中戦争とアジア・太平洋戦争』（永田喜嗣 著）  
コスモリアン・ブックレット No.2



## 資料⑥ 「兵士がとらえた戦争」を描く映画

### 『戦ふ兵隊』

1939年・66分・亀井文夫監督作品



内容が厭戦的と問題になり、検閲によって上映は不許可になり、公開禁止となった「戦意 高揚映画」。

倦怠、索漠、徒勞に果てる行軍、廃虚、病と、言葉では言い尽くせない苦難をなめ続ける前線の日本兵と、中国民衆たちにもたらされた深い傷跡。

彼らの体験した前線には、表も裏もなかった。一切のナレーションを排し30枚足らずの字幕を挿入、シンクロ録音された音声と抑えた調子の音楽と共に、映像をモンタージュし、亀井は“戦ふ”兵隊を素直に表現した。★第37回憲法を考える映画の会で上映

### 『蟻と兵隊』

2006年・101分・池谷薫監督作品・蓮ユニバース



今も体内に残る無数の砲弾の破片。それは“戦後も戦った日本兵”という苦い記憶を奥村和一(80)に突き付ける。

かつて奥村が所属した部隊は、第2次世界大戦後も中国に残留し、中国の内戦を戦った。しかし、長い抑留生活を経て帰国した彼らを待っていたのは逃亡兵の扱いだ。世界の戦争史上類を見ないこの“売軍行為”を、日本政府は兵士たちが志願して勝手に戦争を続けたと見なし黙殺したのだ。

「自分たちは、なぜ残留させられたのか？」真実を明らかにするために中国に向かった奥村に、心の中に閉じ込めてきたもう一つの記憶がよみがえる。

★第50回憲法を考える映画の会(憲法映画祭2019)で上映

### 『日本鬼子(リーベンクイズ)』

2001年・160分・松井稔監督作品  
ディレクターズシステム



15年間に及んだ日中戦争で、中国への侵略行為の実行者となった元日本軍兵士14人を取材し、彼らが行った加害行為の告白を記録。

生体解剖や細菌実験を繰り返した軍医、731部隊隊員や、自らの功績や名誉のために拷問と大量処刑を行った憲兵、上級者の下級者への私的制裁によって日本軍特有の軍隊機構を叩き込まれ、人間性を喪失した兵士たち。

生い立ちや学歴、職業、軍隊での経歴も様々な証言者たちが、人間の行いつる狂気のような行為と弱さ、そして本当の戦争を伝えたいという痛切な思いから、彼ら自身が行った壮絶な事実を語る。★第64回憲法を考える映画の会(憲法映画祭2022)で上映

### 『証言 侵略戦争』

1991年・43分・日本中国友好協会本部



憲兵、将校、南京大虐殺・特務、三人の侵略戦争体験者たちは、自らの加害行為を語ってきた。

子供の頃には虫も殺せなかった人間が、戦場では鬼となった。数々の残虐行為を犯したこの体験者は、痛苦の念をもってその体験を振り返る。中国の人的対応で人間性を取り戻し、帰国後、自らの加害行為を告白してきた心の奥底には、自分と同じ過ちを繰り返してはならないとの強い信念が横たわる。

★第16回憲法を考える映画の会で上映

### 『花と兵隊』

2009年・106分・松林要樹監督・東風



太平洋戦争中、約19万の日本の将兵が、その命を失ったビルマ。

タイ・ビルマ国境付近で敗戦を迎えた後、祖国に還らなかった6名の日本兵、すなわち「未帰還兵」を描く。

戦争の記憶が薄れつつある今、90歳を前後する彼らを20代の監督・松林要樹がとらえた。

2005年から3年に渡る取材で、松林はもうひとつの戦後史ともいべき彼らの暮らしに寄り添い、新たな証言を記録した。それは、ある未帰還兵の現代日本への遺言となった。なぜ彼らは日本に還らなかったのか?穏やかに老後を迎える元兵士たちの平和な日常に、漆黒の時代の闇が潜んでいる。

### 『教えられなかった戦争 中国編』

2008年・98分・高岩仁監督  
映像文化協会



明治以来、他国を侵略して経済発展を続けている日本。自衛隊が海外派兵され、平和憲法の改悪がめざされています。戦争を必要とする者は誰か?それは昔も今も変わらず利益追求だけに走る財閥・資本家です。

日本の敗戦に際して、アジアなどで捕らえられた戦犯 971 名が死刑判決を受けた。しかし日本が最も多くの人を殺戮し略奪を繰り返した中国では、死刑や無期懲役を受けた者は一人もいない。“例え戦犯であっても、みな人間である。人間である限り人格を尊重し 反戦平和のために闘う人間に戻る”。私達は中国のこの政策から今深く学ぶ必要がある。

## 資料⑦ 日中の深い傷跡～南京事件を巡る映画 (1)



### 〈南京事件が描かれている映画作品〉

『**天皇の名のもとに 南京大虐殺の真実**』  
(1995年・50分・クリスティン=チョイ&ナンシー・トン監督)

1937年12月の南京大虐殺とは何であったのか? 当時、南京に滞在していた米国人ジョン・マギー牧師は、密かに16ミリフィルムを回しその実態を記録していた。深傷を負って南京病院に運び込まれた人々、黒焦げの死体、強姦された女性、目を覆うシーンが続く。アジア系米国人のクリスティン・チョイとナンシー・トンは、92年から3年の歳月をかけて、映像資料の発掘と百人近いインタビューを行なった。約50分の映画の骨格は、マギー牧師の貴重なフィルムだ。それに、当時のニュース映像や虐殺に加わった元日本軍兵士、生き残った中国人の証言、南京に住んでいた外国人の日記などを加え、南京大虐殺を様々な角度から検証している。この事件をめぐる日本の論争にも一石を投じるものである。この作品には、南京戦に参加した元日本軍兵士(東史郎・上羽武一郎・永富博道)をはじめ、ソン・シンドー、家永三郎、藤原彰、吉田裕、本多勝一、吉見義明、西野瑠美子、大沼保昭、渡部昇一などの各氏も登場している。★第5回憲法を考えるちいさな映画の会で試写



『**ジョン・ラーベ 南京のシンドラー**』  
(2009年・134分・ドイツ/中国/フランス・フロリアン・ガレンベルガー監督作品)

日中戦争が始まって間もない1937年12月。日本軍は中華民国(蒋介石)の首都南京へ侵攻し陥落させた。首都機能はすでに重慶へ移転しており、数十万の市民と中国兵士、そして十数人の欧米人が南京に残留した。残った欧米人たちは、迫りくる日本軍から市民を保護する為、南京安全区国際委員会を設立、その委員長

に選ばれたのがシーメンス南京支社長のジョン・ラーベだった。本作品は、ラーベと国際委員会メンバーの人道的活動を史実に基に描く。出演:ウルリッヒ・トゥクル、香川照之

★第39回憲法を考える映画の会で上映



『**チルドレン・オブ・ホアンシー 遥かなる希望の道**』

(2008年・オーストラリア/中国/ドイツ・125分)

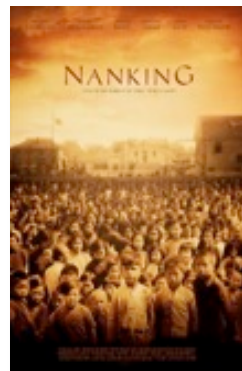
『チルドレン・オブ・ホアンシー 遥かなる希望の道』(-はるかなるきぼうのみち、原題: *The Children of Huang Shi*, 中国語題: 黄石的孩子)は、2008年制作のオーストラリア・中国・ドイツ合作映画。ロジャー・スポティスウッド監督。

1930年代の終わり、日中戦争の戦火が南京から黄石(ホアンシー)に迫ったことを知り、中国人孤児60名を連れてシルクロードを横断した英国人記者ジョージ・ホッグ(英語版)を主人公とした映画。

日本では2009年2月にDVDが発売された後、2009年12月の「南京・史実を守る映画祭2009」で上映された。

1937年、日中戦争が勃発した。上海租界に滞在していたイギリス人ジャーナリストジョージ・ホッグは、日本軍が進撃した南京を取材するため、赤十字の人間と身分を偽って南京に潜入する。そこで大勢の市民を殺害する日本軍の姿を目の当たりにしたホッグは、それをカメラに撮影するが、日本兵に見つかってしまう。

処刑寸前のところをジャックという中国共産党の軍人に助けられたホッグは、ジャックの友人である看護婦のリーの紹介で黄石のとある施設に赴く。そこには60名もの中国人孤児がいた。



『**南京**』(英題: NANKING)

『**南京**』は、アメリカ合衆国製作で2007年に公開された南京事件に関するドキュメンタリー映画。中国で『南京』、台湾で『被遺忘的1937(忘れられた1937)』の題名でも公開された。日本では2009年12月13日の「南京・史実を守る映画祭2009」で上映された。

1937年末に旧日本軍が南京を占領した様子が、西洋人の視点から描かれている。映像では生存者の証言

を集めたほか、ジョン・ラーベや米国人女性教師ミニ・ヴォートリンなどが、南京に南京安全区を設立して住民20万人以上を虐殺から保護した行いを、ヨーロッパにおいてユダヤ人をホロコーストから救ったドイツ人実業家のオスカー・シンドラーになぞらえ、「中国のシンドラー」と位置づけられている。また監督の2人は、中国および日本において80人におよぶこの事件の生存者を探し回りそのうちかなりの人数がこの映画に実際に出演している。



『**南京!南京!**』  
(2009年・133分・中国映画・陸川監督作品)

この映画はフィクションです。ドキュメンタリーとして南京事件の真実を伝える映画とは違います。しかし、南京事件を伝える資料に基づいて、そこで起きたことをリアルに再現しようとしたものです。そのリアルさは、実際、81年前に南京で起きたことは、このような混乱した状況だったのではないかと、日本軍兵士や中国の人々にはこのように記憶されているのではないかと想像させます。

いま、侵略戦争の反省と国民の強い支持のもとにつくられた日本国憲法が変えられようとしています。その「改憲案」の中心は、「9条に自衛隊を加える」という点にあると言われています。「9条に自衛隊を加える」とは、どのようなことを意味するのでしょうか。それは「自衛隊」が「軍隊」になることです。そして自衛隊は、もはや憲法の枠にとどまらないものになります。集団的自衛権、軍事裁判所、徴兵、国民の軍事動員に道を開くものになります。憲法を無視し、歯止めがきかなくなった日本軍を誰が止めることができるでしょうか? それは私たちが歴史から学んできたことです。

私たちは、この映画を今回見ていく中で、そうした自衛隊が軍隊、日本軍になることによって、どのように変わっていくかを考え、想像します。

この映画について監督の陸川さんは「これは記録映画ではない。戦争での人々の感情を描いた」と語っています。日本人兵士を敵としてだけ描くだけでなく、同じ人間として、その混乱や苦悩を描いています。私たちはこの映画を通して、戦場のリアルを想像し、身近な人が、兵士となって戦場に送られることを想像します。そうした想像から「自衛隊を軍隊にする改憲」によって失われるものがどんなに大きいか考えて行きます。(憲法を考える映画の会『南京!南京!』上映会チラシ「私たちがこの映画を選んだわけ」より)

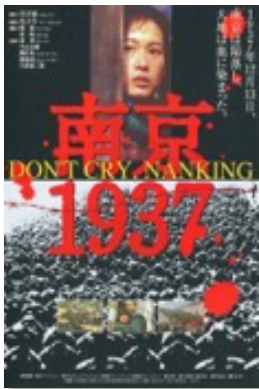
★第47回憲法を考える映画の会で上映

## 資料⑦ 日中の深い傷跡～南京事件を巡る映画 (2)



『南京 引き裂かれた記憶』  
(2007年・日本・85分)

『南京 引き裂かれた記憶』は、2007年制作の日本のドキュメンタリー映画。  
約10年をかけてインタビュー自らの足で探し出した南京大虐殺の中国人被害者や加害者の元日本兵500人以上を取材した中から、7名の証言を取り上げて制作したドキュメンタリー映画である。  
2009年12月の「南京・史実を守る映画祭2009」でも上映された。  
監督・編集：武田倫和  
撮影：松岡環、林伯耀、武田倫和  
製作会社：ノマドアイ、日中平和研究会



『南京1937』  
(1995年・中国/香港/台湾・110分)

『南京1937』（原題：南京大屠殺）は、1995年に製作された中国・香港・台湾合作の映画。日中戦争中の1937年に起こったとされる南京事件を描いた作品。日本人俳優も出演している。日本での公開は1998年5月2日。  
日中戦争のさなかの1937年、中華民国の首都南京へ中国人・日本人の夫婦・親子が帰ってくる。やがて南京も日本軍によって陥落する。日本軍は降伏した中国軍の将兵を虐殺、難民区に避難した南京の婦女子を夜な夜な襲う。難民区の管理者は必死に抵抗するが、ある晩ついに…。

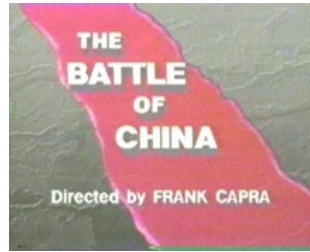


『金陵十三釵』  
(2011年・中国・145分)  
『金陵十三釵』（きんりょうじゅうさんざ、英語題：The Flowers Of War）は、2011年公開の中国映画。張芸謀（チャン・イーモウ）監督作品。日本未公開。題名は『紅樓夢』の『金陵十二釵』に由来する。

南京事件を題材としたフィクション作品で、中国映画史上最高額となる製作費6億元（約78億円）を投じた超大作であり、2011年の中国の年間総興行第1位（約71億円）と大ヒットし、

中国社会に大きな影響を与えた。第84回アカデミー賞外国語映画賞中国代表作品。

舞台は日中戦争下、1937年の南京。南京へ侵攻してきた日本軍から迫害を受け教会の建物の中へ逃げ込んだ中国人女子学生ならびに娼婦らを米国人納棺師ジョン（クリスチャン・ペール）が聖職者になりきり匿い救う。日本軍士官長谷川は女子学生たちを保護する約束をするが、同時に彼女等がパーティーで賛美歌を合唱するよう要求する。女子学生たちを助けるために、一緒に避難していた12人の娼婦と1人の少年侍者が女子学生に扮装し身代わりとして日本軍の南京陥落パーティーに赴き、その際にジョンは修理された教会のトラックと密かに入手した通行証で女子学生たちを南京から救出する。



『ザ・バトル・オブ・チャイナ』  
(1944年・アメリカ)

フランク・キャブラが監督したプロパガンダ映画『我々はなぜ戦うのか』シリーズの6作目である。1944年（昭和19年）にアメリカで上映された。戦争当事国の中華民国をはじめ、欧米や中華人民共和国などではニュースや

報道番組において、現在でも日本軍による残虐行為の記録フィルムや記録写真として、これらの映画の一部が頻繁に使用されている。

『ザ・バトル・オブ・チャイナ』は、このシリーズの6作目にあたり、シリーズ7作中で唯一、アジアにおける戦闘を題材にしたものである。1944年にアメリカで、一般に劇場公開された。数人の評論家から問題点（内容に誇張が多い・中国人自身の問題に全く触れていない）を指摘されたことにより、一時的に回収されたが再度上映され、戦争終結までに約400万人が観ることになった。スタンフォード大学歴史学部長のデビッド・ケネディは南京大虐殺は反日プロパガンダの中核となり、この映画はその顕著な一例であるとしている。



『中国之怒吼』  
(1945年・中国（国民政府）  
中国語題：中国之怒吼)

『中国之怒吼』は、1945年（昭和20年）秋頃に、アメリカ製の映画『ザ・バトル・オブ・チャイナ』を編集・追加して中国（国民政府）で作られたプロパガンダ映画である。南京事件の証写真・映像として、この映画のシーンが使用されることもある。

長崎原爆資料館では長崎の中国総領事館が「南京大虐殺の写真」を展示することを要求したことで、資料館は圧力

に屈してこの宣伝映画の1コマをプリントして「泣き叫ぶ婦人の連行写真」として展示していたことがあったが、結果的に「信憑性に乏しい」と判断され撤去するに至っている。

また1983年（昭和58年）に公開された記録映画『東京裁判』（小林正樹監督）の中でも南京事件を説明する映像として、この映画の一部が使用された。それについて渡部昇一から「やらせ」を指摘され、小林監督は「確かに、あれは中国・国民政府が南京事件を告発するためにつくった映画のフィルムであり、いわゆるやらせがかなり多いことも、最初からわかっていました」と述べる一件も起こっている。上海南駅での子供を映したシーンでは「発炎筒」を炊いて演出しているのではないかと指摘されている。

\*各作品の解説は、■『海外が描いた日本の戦争～世界の対日戦争映画が語る日中戦争とアジア・太平洋戦争』（永田喜嗣 著 コスモリアン・ブックレット No.2）を参考にさせていただきました。



第87回 憲法を考える映画の会  
は、「憲法映画祭2026」として  
文京シビックホール（小ホール）  
で2026年4月18日（土）一日5作  
品の上映会として行われました。  
上映プログラムは、『二十四の  
瞳』『ラストメッセージ 不死身  
の特攻兵佐々木友次伍長』『あり  
ふれたファシズム』『戦争のつ  
くりかた』『百姓の百の声』です。

『ラストメッセージ』の上映後、  
監督の上村道夫さんに映画制作の  
背景などお話を伺いました。

【『ラストメッセージ』監督上村道夫さんのお話】

今ご紹介いただきました上松です。お忙しい中、また  
天気の良い土曜日にこんなにたくさんの方にお越しいただき  
ましてありがとうございます。この憲法映画祭という歴史  
のある映画祭にこの作品をかけていただいたことに感謝して  
おります。

時間が限られているので、3点に絞ってお話しさせていた  
だきたいと思えます。一点目はそのどうやってこの映画がで  
きたのかっていうことなんですけども、ちょうど戦後70年  
の年、2015年ですね、私はその頃「BS朝日」というところ  
で番組作ってまして、その番組の司会にですね、劇作家の鴻  
上尚史さんという方がいらっしゃったんですけれども、ある  
日、2015年4月の今頃だと思いますけれど、その日の放送  
する直前にいつも雑談をする時間があって、そこで突然鴻上  
さんが「特攻隊に9回行って9回帰ってきた兵士がいるんだ  
よ」という話をふっとされたんですね。それを聞いて私は  
びっくりしまして、特攻隊っていうのは、たぶん皆さんもそ  
うでしょうけど、行ったら帰って来ないっていうのが普通の  
イメージですよ。 「えっ、そんなことあるんですか」と  
って言って、じゃあちょっと調べてみますと言うことで、その時  
はそれで終わったんですけども。

それからその年は、戦後70年でしたので、なんか特番が  
当然あるので一生懸命調べました。それで映画の中にも出て  
きますけども高木俊朗さんという方がこんな分厚い「陸軍特  
別攻撃隊」という本を書いておられまして、それにこの佐々  
木友次さんのことがかなりくわしく書いてあったんです。

それをざっと読んですごいなこれは、絶対作品にしたいな  
と思いきまして、そこから取材を始めました。それでまあいろ  
いろ、岩本大尉の郷里ですとか、主人公の佐々木友次さんは  
北海道当別町の方ですから、当別町とか、それから茨城県の  
銚田とか取材して、とくに当別町の取材をしている最中に、  
最初は友次さんが、まさかご存命であるとは夢にも思ってな  
かったんです。当然70年も前の話ですから亡くなってるに  
決まってると思ってたんです。ところが近所の方のお話を  
伺っているうちに、あれ、ひょっとして生きてるんじゃない  
かしらと思って、それで当別町の役場の方に、佐々木友次  
さんの取材をしているんですけど、佐々木友次さんはご存命  
なんですかって聞きました。そしたらそれは個人情報だから  
申し上げられませんが、それを聞いてあっと思いましたね。  
もし亡くなっていたら、亡くなっていますですむ話ですから。  
それを個人情報だと。これは生きているに違いない。こう確  
信して、さらにその追加取材をして、あそこの札幌の病院に  
いらっしゃるといことがわかりました。で、終戦特番です  
から8月15日に放送予定してたんですけども、それがわ  
かったのは7月ぐらいだったんですね。7月の16日に他の取  
材を全部固めて、最後に行きました。だけでも病院というこ  
ろは取材がなかなか難しいですね。 ↗



正面から行っても絶対断られるんです。「いやそれは困りま  
す」という感じで。それで大きいテレビカメラ持っていつ  
たんですが、下に待たせておいて、それで私ともう一人女性  
とね、手提げバグ一つで入って行ったんですね。四階に  
ナースステーションがある。佐々木友次さんのお見舞いに来  
たんです、と言ったら、あそこを曲がって行ったところす、  
みたいな感じで、しめた、と思って、それでそこに行ったら  
ネームプレートに佐々木友次ってたしかに書いてあったん  
です。事前に家族の方には取材をお願いしたいと申し入れて  
あったんですけども、だめとかいいよとか返事が来なか  
ったんです。で、行ってみるしかないと思って、それで行っ  
て入って、そしたら、いらっしゃいました。いらっしゃった  
んですが寝てたんです。スヤスヤお休みになっていたんです。  
なんかもう、起こすのはちょっとと、もう1回外に出て、一緒  
にいた者とどうしようかねと、ここまで来て寝てるから帰  
りますなんて絶対にできないだろうと、もう一回入ったん  
です。そしたらふっと動かれたんですね。ああ起きてらした、よ  
かったって思って、それで、「佐々木友次さんですね」と  
言ったら「そうですよ」と。作品の一番頭にあるあの音声の  
まます。その時まだVTRを回してません。あの録音器だ  
け着けていってました。それでお話をしたいんですけど、と  
言ったら、「いやもういいんだよ、」って、おっしゃる。多  
分そういうことだろうな、って思っていたんですが、とい  
うのは北海道新聞も、地元のテレビも、その友次さんからお話、  
1回も聞けてないんですよ。もういいんだよ。多分そう言  
うだろうなと思って、その岩本大尉の義理のお子さん（妻の和子  
さんが岩本大尉の姉の子を養子として育てた）その義理のお  
子さんのところへ取材に行ったときに、「実はこのあと友次  
さんのところへ取材に行くので、何か伝言ございますか」と  
言ったんです。「あ、じゃこれこれ伝えてください」と  
おっしゃったんで、友次さんのところに行った時に「友次さん、  
（岩本大尉の）義理の息子さんから伝言預かってますよ」と  
言ったら、「あ、そうなの」みたいな感じで、それから急に  
胸襟を開いていただいて、それで一時間ぐらい話しをして  
くれました。途中から大きいテレビカメラを持ってくるとや  
やこしいので、その時もう一人のアシスタントの女性があの  
家庭用のデジタルビデオカメラ持ってたんです。それを回し  
てもらってそれでこの作品ができた、こういうことなんで  
す。まだいろいろ話があるんですが今日は3点だけ。

2点目はその特攻を命じた方、ですね。「志願なのか、命令  
なのか」というのがありましたけど、その軍部の上層部の  
あまりの無責任さにね、取材していて腹が立ちましたよ。

あのフィリピン特攻を指揮したのは富永恭次という第四航  
空軍の司令官でしたけれども、その司令官、初めて特攻に行  
く友次さんたちの前で、俺も最後の一機に乗って行くから  
って、皆感激するわけですよ。ところが何でしょう。途中でい  
なくなっちゃった。  
(次ページに続く)

【『ラストメッセージ』監督上村道夫さんのお話 (続き)】

一人で台湾に逃亡しちゃったんです。当時も非常に問題になったんですけれども。それからもう一人、あの後で出てくる菅原道大って第六航空軍の司令官、第六航空軍っていうのは九州・沖縄方面の司令官なんですけれども、中将ですね、この人が取材の中で特攻は「命令」か「志願」ということについて、「志願」ということによって、出撃したとおっしゃってるわけですよ。それで天皇の命令も、お前は死ねとはおっしゃらないです、と。我々も誰もお前が死ねとは決して言わないと言ってたわけですよ。司令官が直接死ねとは言わないでしょうよ。しかしあの戦時体制下でね、死ねと言ってに等しい、「死ねって言ってますよね、実際に」「いや、それは言ってない」と。「志願」だと言ってとぼけちゃってるわけですよ。それで戦後結構長く生きられて、さすがにちょっとね、心がうずいたのか、世田谷に特攻観音っていうのを作ったんですよ。それでその命令する側にいた人たちが何人かお金出し合ってたね、作ったんです。そこで私も行ってみたらね、お堂の入り口に立札があってね、そこに特攻に志願し、「志願」って書いてあるんですよ。「ええ、全然違うじゃん」って。

その軍のね、上層部の責任のとらなさ、無責任さ。これは先の戦争中だけじゃないと思います。今もどうですか？ っていうこの間の自衛隊の女性の方が自民党大会での国歌を歌ったんですってね。それで政治的利用じゃないかって言われた時に、防衛省も、防衛大臣も、総理も、知らなかったとか言ってるわけですよ。知らないわけがないでしょうってね。大事な党大会の式次を知らないわけがないと思うんですよ、私は。それで仮に知らなかったとしてもですよ。その終わった後にその小泉さんがそこで歌った女性とね写真撮って握手しているわけですよ。それが後にね、「それが政治利用じゃないかと、自衛隊の」と言われた時に、「いや国歌を歌うのは政治利用じゃない」とか言ってるわけですよ。国歌を歌うのは別に政治利用じゃないけど、どこで歌ったかが問題であって自民党というその政党のあれで歌ってたらね、それは政治利用なんです。とまあそれはね、知らなかったですまされてるでしょう。

もう一つ、この前、中国大使館に自衛官が刃物持って入った。あれも誰も責任とってないんですよ。遺憾なことですよ。遺憾で済む話でしょうか。そういう軍の今で言えば自衛隊もそうですけど無責任体制というのが決して戦争中だけのことじゃなくて今も連綿と続いているんじゃないかと私は思います。

それからもう一つ、特攻という未曾有の攻撃をやって、それを後押ししたのがメディアです。当時は新聞とラジオとニュースフィルム。それは中にもちょっと出てきましたが、新聞なんかはその従軍報道で行っていて、実際にそこへ行っているわけではなくても、大本営発表でみんな書くんですね。

ほとんど作り話なんですよ。美談に仕上げてる。それはあの、あるいはラジオもそうなんですけれども、何も知らない国民は戦争にもう飽き飽きして、もう末期ですからね、早くやめてくださいよと思ってたのが、突然その特攻の報道が出て、「あんな若い人たちが自分の命をなげうって、国のため家族のためって。私たちもね、しっかりしなきゃいかん」みたいなそういうプロパガンダの役割を果たしていたと思うんですけれども。三年前にNHKの方が「ラジオと戦争」という本を書きまして、その当時のねラジオ、ラジオは完全にその報国、国に報いる、放送は報国でなくてはいけないということだったと。NHKさんが書いてるんですよ。いろんなことがそこに書かれていて、私も知らなかったんで読んで驚いたんですけれども、その人が最後に書いてるのは、「で、それはその戦争で終わったんじゃないかって今も続いている」と。その公共放送は、公共放送の意味するところは、戦前戦中と変わってない。それは政府と一体になった放送のことだと、こう言ってるわけですね。それはたぶんね、今も変わってないんじゃないかと、あんまり。あのNHKだけじゃなくて民放もね、私も民放の報道をずっとやってきましたから、ある程度分かってはいるんですけれども。



それにしても最近の報道ね、ちょっとどうなのって。さっきの自民党大会のことも、あんまり触れないしね、中国大使館もあんまり触れない。でそれから今その憲法改正しようっていうんでその内閣情報局だとか、スパイ防止法だとかいろいろんなことが本当に検討されているんです。あまり報道されないまま。それでニュースつけたら京都の少年の、少年のは悲惨な事件ですからね、私も最初は興味持って見ましたけどね。もう容疑者が捕まっているらしくと、いつまでやってんの、それ。ニュースとかワイドショーとか見るたびに、まだやってるわけですよ。その間に粛々とその政府与党は憲法を変える何なりってことをやろうとしてるわけですよ。それでこの間、私も取材で4月8日に平和憲法を守る緊急行動アクションっていうのを国会前でやりました。それで取材に行ってみたんです。そうしたらね、3万人ぐらいの人が集まってね、すごいですよ。今日来られている方の中にも行った方いらっしゃるかと思いますが。あっ結構いらっしゃるんですよ。あれはねテレビニュースでほとんど取り上げてないんですよ。新聞も取り上げてない。東京新聞と、朝日新聞が次の日かなんかにちょっと書きましたけども、当日はどことも取り上げてない。私も家帰ってね、どっかやってるんじゃないかと、見たらびっくりしました。全くやっていない。どうなってんのこれって。ここまで言うとね、何でしたっけ、時間もそろそろで終わりますけれども。特攻隊についていろいろ言いたいことも事実もまだあるんですけども、まあこういうこともあったっていうことを知っていただいただけでも、ありがたいと思います。どうもありがとうございました。

【参加票に寄せられた感想など (1)】

- 「ラストメッセージ」～「戦争のつくり方」を観ました。」  
「ラストメッセージ」はよく多くの証言を集めたものだと感じました。(10年前がタイムリミットだったのでしよう。)
- 「ありふれたファシズム」は展開が分かり難かったですが、リアルな写真・動画を見ると自分がそこに居るかのような感じになりました。  
「戦争のつくり方」は20年以上も前に作られた映画ですが、その後を予告しているかのようです。日本の置かれた厳しい安全保障環境の中で、どう内外の安全を守れるか、多角的に考えなければならぬと感じます。(N.I.)
- いつも映画会ありがとうございます。難聴者です。字幕があると、うれしいです。全部見ました。どれもよかったです。目が痛いです。(K.K.)
- 「百姓の百の声」は、いろいろ、バラバラと見せてくれておもしろかったです。(K.I.)

## 資料③ 第87回 憲法を考える映画の会（憲法映画祭2026=4/17）報告（3）

●憲法映画祭は、たいへんよい企画だと思います。是非もっともっと多くの人びとに、ご参加いただけたらと思います。そのための宣伝を強めて下さい。若い人たちにはSNSが有効です。ご活用をお願いします。沖縄日本から米軍基地をなくす草の根運動 共同代表 (M.H.)

●若い人々に是非見てもらいたい。(Y.M.)

●いい映画を知りえて、よかったです。(I.M.)

『二十四の瞳』、今改めて観るとミュージカル映画のようです。60数年ぶりの再見です。

『ラストメッセージ』無責任の日本の組織。そして天皇制。『ありふれたファシズム』米ソ冷戦時代の作品だなと思うと同時に「何を伝え、どう教えるか」の宇野重吉のナレーション、響きました。『戦争のつくりかた』まさに、今、秀逸です。ありがとうございました。学ばせていただきました。(S.K.)

●はじめてめて参加させていただきました。もっと早く知りたかったです。機会があればまた参加したいです。QRを付けて頂ければゆっくりかけます。わずかな休憩時間ではむずかしいです。(K.K.)

●「ラストメッセージ」よくぞ亡くなる半年前にインタビューしてまとめたなあ、すごい映画だと思いました。「ありふれたファシズム」はサナエ、サナエの声が聞こえてくるような。まさにサナエは国民をファシシネイトしたわけですが。戦勝国ソ連ですが、アメリカは日本やドイツに対してこういう映画は作ったのでしょうか？無知なので知らないんですが。それにしてもよく映像が残ってるなあと思いました。

頭骨を測ってる場面で、東大、京大がアイヌ、琉球民族の遺骨を墓から盗んで今に返還しないのは（少しは返還しましたが）帝国主ギ、植民地主ギの継続だと実感しました。

最近の国会前の反戦、改憲反対のデモ、集会がネットにアップされると「日本は戦争してない。何言ってるの？」という投稿が散見されます。しかしホントにそうでしょうか？侵略戦争してるアメリカや虐殺してるイスラエルから武器や警備システムを買うことはその国の儲けになり、次の戦争の原資にならないでしょうか？なると思うんですが。虐殺戦争に負担してると思います。

『百姓の百の声』は見のがしたので見られて良かったです。百姓のことも農産物のことも全然考えてない自分が情ない。お米の値段に右往左往してちゃダメですね。(T.A.)

●古い映画で声がわれて聞こえが悪かったのが残念です。私が教師になろうとしたもとの『二十四の瞳』です。映画で見たことがあったかのように思いましたが私が一番記憶しているのは、最後の視力を失なった教え子が、写真を指さし、一人一人の名前を言うのに、一人ずつずれていたというのを記憶していたのですが、それはなかったので小説で読んでいたのかもしれませんが。ずっと、涙が止まらず、みていました。一人一人の命が大切戦争派であり、二度とあってはいけません。また、そうしたアジアの人々も含めて犠牲の上でできた憲法を。大切に守っていかねばならないと、強く宇決意しました。ありがとうございました。(C.O.)

●二十四の瞳を観に伺いました。幼い頃、自己主張をほとんどしない祖母が観たいと言って見にいった作品です。改めて観て胸がいっぱいです。一人一人の人が大切にされていて、一人一人の人生がとても大切なのだと。大切に、これだけ一人の人生がとても大切なのだと。戦争は生活も教育も人生も夢も希望も健康も生命さえも奪うおそろしさを感じました。今観ることができて本当に良かったです。本日はどうもありがとうございました。(M.T.)

●今年は特に憲法・戦争のもんだいがひっ迫しているように感じ、こちらのたくさんの方の映画を一挙に見せて頂いて学べる会には是非来ないと、とても意味のある日だと思って参りました。

どのえいがもものすごくよかったです。これからもよろしくおねがいします。(A.K.)

●「二十四の瞳」は何回泣いたことか。感動でした。お百姓さんのがんばりにびっくり、元気をもらいました。(S.K.)

●鴻上尚史の『不死身の特攻兵』を読了してしまいました。何が何でもの意気で参加致しました。素晴らしい作品です。国家全体が「希死カルト」の如き状態で、きちんと正気を保っている人が存在したという事実は、心うたれ、また強く励まされる想いです。次回も、何としても参加します。(Y.K.)

●「ラストメッセージ」は以前に特攻の本を読んでいて、観たい映画だったので、大きな納得を持ちながら観ました。為政者が民の命を守らないことがあり得る。その構図にあらんとすると同時に、私たちがもっとしっかり発言をしていかねば、とも。

『百姓の百の声』はさすががしく、“人の生き方”、思想が見えて希望を見ました。食、はいのちの根本。しみじみ思えます。(K.S.)

●「二十四の瞳」  
昨年の「禁じられた遊び」と同じく、子供（小1の12人）の純粋さ、特に大石先生をたずねて、つかれて、お腹が減って泣きながら、それでも前に進むシーンに感動しました。そういったエピソードの積み上げだが、3時間という長さを感じなかった。戦争の描き方も静かで、たんたんとイヤミではない。高峰秀子の先生が先生をやめて、また戦後カムバックするところもイイエンディングでした。(S.S.)

●見ごたえのある5本(?)でした。(A.S.)  
“24の瞳”初めて全編を見させていただきました。未舗装道路があたり前の時代を思い出しました。秀子さんの大石先生～子供に対し真摯であろうとした姿、時代の中で物とされて行く子供達。木下恵介さんの気持ちが伝わりました。“ファシズム～プロバガンダが色はしたが、戦争がどんなものか、熱狂とは何か、その持つ空恐しさは、ガザのイスラエルの姿、プーチンの姿、ビルマ、スーダン、イラン。何故、僕等は止められないんだろう。(K.T.)

●<ラストメッセージ>  
●初めて参加しました。今まで思っていたことをていねいに映像で拝見して改めて歴史の検証をしたようにおもいました。<24のひとみ>当時文部省の推せんだったとはびっくり。最初に出演した子供達と自分が同じ位の年齢かな…?と思いました。多分小学校の時にどこかで観たように思います。とても優しい心の先生に改めて感動しました。戦争について改めて、優しく問う映画でした。(T.T.)

●「ラストメッセージ」から拝見しました。特攻についての見識が広まり、深まった。これからも繰り返される恐れあり。どうしても美談になってしまう。自分がそんな立場に陥ったとき、はたして俺は嫌だと頑張り通せるか。佐々木さんのように「死ぬことが目的でない」とクールな自己を主張できるかあまり自信がない。らすとに「百姓の百の声」というプログラムに拍手！僕はまだ土いじりはやっていないが毎朝四股を踏んで大地に感謝、植物に活かされている動物としての自分の体を大切にしたいと思っている。今朝のニュースで高市内閣が武器輸出を始めると宣言。それが抑止力になるなんて本末転倒した考えです。ともかく戦争をしないためにできることをやっていきたい。(M.K.)

## 資料③ 第87回 憲法を考える映画の会（憲法映画祭2026=4/17）報告（4）

### 【参加票に寄せられた感想など（2）】

- かなり遅刻してしまったのですが、「ラストメッセージ」を拝見し、上松道夫監督のトークをきくことができ本当に良かったです。生きようとした特攻兵佐々木友次さんのお声をきけてよかった。お母さんに会いたいということだけだったと話されているのが特に心にのこりました。また「ありふれたファシズム」のナレーションが宇野重吉さんだったと最後にわかり、文化人の仕事というものを感しました。(M.N.)
- アニメは特にわかりやすくよくできていた。(H.N.)  
見たい映画、見せたい映画  
「人間の条件」「日本の一番長い日」(T.H.)
- 「百姓の百の声」、大変勉強になりました。色々なテーマが入っていました。「ありふれたファシズム」も良かった（悲惨なことがわかった）です。大衆、被害者、反抗する者。それぞれ顔が違いました。特に大衆は変化がありました。現代に示唆するものがありました。(S.F.)
- とても貴重な機会でした。『二十四の瞳』は有名な映画でしたが、見るチャンスがなかったので、素朴な味わいでした。「ラストメッセージ」は、何とすごい、としか言いようがなかったです。話しも良かったです。「ありふれたファシズム」、ヒトラーが神になったわけがわかりました。「戦争のつくり方」は、まさに今ですね。(M.M.)
- 映画を選んだ理由と意義を話してくださるのがいいです。選ぶのは大変なのではと思います。スタッフの方々が相談されているのでしょうか。知らなかったこと、考えなかったことたくさん知ることが出来ました。思考の種を撒いていただきました。育てて大きくしたいです。できれば収穫も。いつもありがとうございます。(N.Y.)
- ずっと続いて欲しい映画祭です。又、地方など小規模でも、上映会してみたいと思いました。(J.Y.)
- 朝から見て、む中でみてくたびれました。この5本を選んでもくださったこの映画会のみな様に敬意を感じ、感謝します。「ありふれたファシズム」ソ連製作!!プーチンを思い、複雑です。声が宇野重吉で、時間軸がぐちゃぐちゃ（内容と現在）になりそうです。最後はロシア語（たぶん）の女の子。今、ウクライナの兵士の母かもと思いました。(K.Y.)
- 『ありふれたファシズム』が提示しているメッセージ。まさに今の日本に向けられるべきものであると感じました。この記録映画が制作された1965年の時点でもファシズムが消え去っていない危惧が話されていましたが、それから60年も経った今、無慈悲な戦争が継続し、現代のヒトラーとも言うべきトランプに媚をうって加担している首相が日本をどこに向かわせようとしているか、とても心配です。今日は観て良かったです。ありがとうございました!!(S.W.)
- 『二十四の瞳』を見ました。古い作品ですが、現代でも通ずる意義深い内容で、とても参考になりました。あらゆる方法を用いて平和憲法の精神を守っていかなければと思いました。今後とも何かとお世話になるかと思いますが、何卒宜しくお願いします。(J.W.)
- 「百姓の百の声」、拝見しました。農業のこと、何も知りませんでした。1千万人うようよで米も作らずに暮らしていることを恥じるばかりです。(Y.O.)

●6月に80になります。「二十四の瞳」子どものころ学校の体育館でみたように思います。本も読みました。今この時期、この映画をみる事ができること、ありがたいと思って来ました。とてもよい映画でした。ものすごい訴えあり。(無記名)

●生まれてくる子ども  
何を伝え、どう育ててゆくか  
戦争のつくり方、わかりやすいお話でした。  
今、本当に憲法を守る行動重要ですね。(無記名)

●「24の瞳」何年かぶりで観ましたが初回をみた感想が全たく違い、自分でも驚きました。  
木下恵介監督と音楽担当者に心からの感謝です。  
この映画上映の条件として無料ということに制作者たちのNO戦争と言う事を強く感じました。  
「ラストメッセージ」軍側の報告することは全くひどい。  
この件についてマスコミ批判を監督がされていたが本当に同感です。報道ステーションの担当だったとの事なるほど…と納得です。  
「ありふれたファシズム」  
何とも後味の悪い映画 気分わるくなる。(無記名)

●「二十四の瞳」涙の止まらない映画でした。汚してはいけない瞳、いのちを守ることに徹する愛が貫ける生き方の大切さを心底思いました。危険なことを感じる今憲法を守る行動をとりつづける心を育みつづけたと思いました。  
「ラストメッセージ」  
若き日に明治・大正生まれの高れい者からお聞きしたこと。特攻自分の隣で死んでゆく戦友、その友を置いたまま進軍した自分。8/15になると当たった砲弾のあとに痛みを感じるなど…思い出しました。歴史に人間に自然界に傷を残すばかりの戦はゼツタイNOですね。ぬちどう宝。  
ファシズムのつくり方。昨年みたボンフェッファの映画を思い出しました。いのちの源である神を畏れない人間の罪の結果の滅びの姿を改めてみました。コルチャック先生も思い出しました。(無記名)

●百姓の映画を見せてもらって良かったです。けん法のごことはわかりませんが、いまの社会が行きつまっていることとその解決が日本にありそうなことが感じとれることができました。(無記名)

●毎回到わり意義深い映画をありがとうございます。まして“憲法映画祭”は、なおいっそう考えになられた作品の数々で実に頭が下がります。  
直今回約10時間もの長時間でした。途中で居眠りかと思っておりましたが、しっかり四画面と向き合うことができました。ということはいかにそれぞれが心に訴える作品かと帰宅の車中でいい映画会に出会えたものとありがたい気持ちでいっぱいでした。なかでも「百姓の百の声」には国のあり方に??? 出いっばいになりました。(S.S.)

●『ありふれたファシズム』を見て良かったと思い書いています。安倍政権から言葉・内容をよく聴かないとこんなはずじゃなかったと思ったことがあったから、高市政権も同じかと。高市政権よく頑張っている人、の声は強い海次回フレーズで支持をし出しているの、考えることをしなないと思っています。見たい映画『オールド・オーク』『わたしはダニエル・ブレイク』『家族を想うとき』(Y.K.)

## これからの憲法を考える映画の会

## 第89回 憲法を考える映画の会

日時：2026年8月29日（土）

会場：文京区民センター3A会議室

映画：『1923（イチ・キュー・ニーサン）』（予定）

(2024年制作／キム・テヨン監督・チェ・ギソク監督／116分／韓国映画／ドキュメンタリー)

- ・関東大震災100年を期して韓国で作られた関東大震災の朝鮮人虐殺を採り上げたドキュメンタリーです。
- ・韓国の原題は『1923 関東大虐殺』、案内チラシには「…なぜこの「大虐殺」の事実が公の歴史としてきちんと扱われてこなかったのか、なぜ隠蔽あるいは見過ごされてきたのか…その背景にある差別意識、権力構造、歴史認識の問題にも迫り、被害者の遺族や市民活動家、研究者たちの声を通じ、『忘れ去られた真実』を掘り起こしていく。」とあります。



## 上映会・催しの案内

6月8日（水）15時半～ 映画「戦雲（いくさぶむ）」上映会＋元山仁士郎さんトーク(国際基督教大学＝武蔵境駅からバス)

6月13日（土）13時半～ 映画「医の倫理と戦争」上映会(さくらみち集い交流館＝京成北総線新柴又駅)

6月13日（土）14時～ スパイ防止法の成立に反対する市民集会「政府の政策を批判する人はスパイですか？」青木理さん（鶴見駅前ホール＝JR鶴見駅）

6月14日（日）14時～「はだしのゲンはまだ怒っている」自主上映会（光が丘区民センター＝大江戸線光が丘駅）

6月14日（日）11時～ 三多摩レイバー映画祭2026『死守』『東大生のためのワークルール入門』『懲罰自転車』『遼寧省の万人坑を訪ねて』（キノ・キュッハ＝国立駅）

6月14日（日）13時半～『壁の外側と内側 パレスチナ・イスラエル取材記』上映会（調布市文化会館たづくり＝京王線府中駅）

6月20日（土）～26日（金）映画「ひめゆり」（ポレポレ東中野＝総武線東中野駅）

6月20日（土）12時45分～ 憲法フェスティバル「わたしの・あなたの・だれかの人権～基本的人権を考える」斉藤幸平さん・松元ヒロさん（日経ホール＝大手町駅）

6月20日（土）18時半～ 第205回市民憲法講座「いま憲法審査会はどうなっているか」田中隆さん（文京区民センター＝春日駅/後樂園駅）

6月22日（月）13時/19時・23日（火）19時 映画「骨を掘る男」上映会（木更津駅東口駅の図書室 FLAT）

6月27日（土）13時～ 映画「100,000年後の安全」上映と講演「行く当てのない核のごみ」（高野聡さん）（茅ヶ崎市役所分庁舎＝茅ヶ崎駅）

6月27日（土）～12月27日 高麗博物館企画展「絵本で知ろう！おとなりの国 パート4」いのち、愛、平和の童話作家 権正生（高麗博物館＝地下鉄東新宿駅）

6月27日（土）18時半～ 追悼上映「仲代達矢“役者”を生きる」羽村上映会（羽村市生涯学習センター＝JR羽村駅）

7月1日（水）14時～映画『横浜事件を生きて』をみよう！松原明さん（日本キリスト教会郡山伝道所＝郡山駅）

7月2日（木）19時～ 第135回 VIDEO ACT! 上映会～アメリカ帰還兵と憲法九条～映画『アレン・ネルソン 9条を抱きしめて ～元米海兵隊員が語る戦争の真実～』（東京ボランティア・市民活動センター＝飯田橋駅）

7月12日（日）13時～ 盧溝橋事件記念のつどい映画「語られなかった戦争・侵略パート6」森正孝さん（横浜市社会福祉センター＝桜木町駅）

7月20日（月・休）14時～ 映画『ある家族の肖像～被爆3世代の証言』（『ラストメッセージ』の上松道夫監督新作）上映後、金谷康祐ピアノ生演奏＋鈴木カオルさん／上松道夫さんのトークショー（なかのzeroホール＝中野駅）

## 「憲法を考える映画のリスト2026年版」が完成

映画を一緒に見ることで一緒に考え、話しあう場があちこちで作られることの役に立てばと考えて、2014年から2年おきに作ってきた「憲法を考える映画のリスト」の最新版、2026年版が完成しました。

新しく加えた作品を含め、200の映画作品の「どんな作品?」「どこで借りられるの?」「上映料はいくらぐらい?」に答える情報が掲載されています。



1冊600円です。憲法を考える映画の会の上映会場にて販売。

郵送でお求めの方は、郵送料を含め1000円です。

住所、氏名をお教えいただければ「リスト」とともに振込用紙を同封してお送りします。